

2016年4月20日午前10時、日本福音ルーテル大江教会にて、「臨床宗教師（チャプレン）」活動を担う宗教者が会議を行った。九州臨床宗教師会会長・吉尾天声師（浄土真宗大谷派）の呼びかけによる。

「臨床宗教師（チャプレン）」とは、宗教施設外の公共の場で他宗教・非宗教の人々と協働して奉仕活動を行う宗教者のことをいう。東日本大震災の支援現場から生まれた言葉だ。東北大学は2012年4月、東日本大震災の現場で「臨床宗教師」として活動した宗教者と協力し「実践宗教学寄附講座」を設立した。この講座の研修修了生が中心となって組織されたものが「九州臨床宗教師会」である。

会議には、九州臨床宗教師会の会員の他に、日本福音ルーテル教会や日本基督教団、キリスト聖協団など、熊本で支援活動を展開しているキリスト教諸派の牧師が参加した。また宮城県からも、仮設住宅などで津波と原発事故の被災者への支援活動を継続している宗教者（曹洞宗・プロテスタント）が4名参加した。

会議においては、まず現場の状況から必要を確認すべきこと確認され、参加者全員から詳細な現場報告が行われた。そして東北の経験が共有され、以下の通り確認された。

1. 「臨床宗教師（チャプレン）」の活動を行っている人と可能な限り広く連帯すべきこと。
2. 「良いことをしている」という思いに押し出されて行政などの諸機関と衝突しないよう、最大限の配慮を払うべきこと。特に、行政や自治会の信頼を得るためにも、自宗・自派の勢力拡大と見做される活動を排除すること。そのためにも、幅広い諸宗教者との連帯が重要となる。
3. 日常の活動の中で得られた関係性を基盤に活動を展開すべきこと。
4. 募金が集まった時にどうすべきか、責任者が議論を深めておくこと。
5. 教団教派が作り出す組織的活動には、隙間が生まれる。その隙間を埋めるためにネットワークが活用されること。その際、ネットワークは生き物のような様相を示すので、「角を矯めて牛を殺す」ことを避けなければならない。
6. 発災直後からしばらくの間は、個別に多様化している被災者の状況に対応するための人的支援が、決定的に不足すること。「寄り添い」「声をかけ」「傾聴する」働きを、宗教者が担うべきである。
7. 情報を一元的に集積・整理・配信する事務局が必要とされていること。ただし、その役割を担う者が忙殺されること。その担当者を支える仕組みが必要となること。

会議の後、参加者は個別に連絡先を交換し合い、各自の現場へと戻っていった。この会議のような集まりが各地に起こり、ネットワークがきめ細やかに広がれば、被災者の心を支える活動は一層実効性を持つものとなるだろう。